

〈小特集〉 成城学園所蔵小林秀雄文庫

教育研究所にて保管している

「小林秀雄文庫」について

青柳 恵 介

現在、成城学園教育研究所では文芸評論家の故小林秀雄氏の旧蔵書一、四九〇冊（和本・洋書をふくむ）を保管している。これらの図書を「小林秀雄文庫」と呼び、研究所外への持ち出しは許可してはいないけれども、平成十三年五月より研究所の他の図書同様に閲覧を公開している。「小林秀雄文庫」の公開については、これまで教育研究所発行の『成城教育』、成城学園発行の『成城学園報』『成城だより』等で折々に広告して来たが、この文庫を教育研究所で保管するに至った経緯をふくめてここで改めて公けにしておきたい。また、この文庫の今後の活用方法についての問題も、成城大学内、成城学園内において、十分に認識され検討されているとも思われないので私見も混ぜつつここで提案をしておきたい。

平成五年の五月下旬から六月上旬に、話はさかのぼる。私

は若き友人の白洲信哉さん（小林秀雄氏の孫）と、その母堂の白洲明子さん（小林秀雄氏の息女）から、小林氏の遺した蔵書を、活用されるならば教育研究所に一括寄贈してもいいのだが如何か、という申し入れを受けた。蔵書の性格の主要をうかがい、当時所長であった中村英雄氏と相談の上、これをありがたくいただくことにした。中村英雄氏は「本には二種類の価値のある本があり、一つは本そのものの自体に価値のある本、もう一つは価値ある仕事を成した人が手で触った本だ」と言って寄贈を受け入れることの応援をして下さった。

平成五年六月十二日と十五日の二日、私は学園のセドリック・パンを運転し、鎌倉の小林家にうかがった。本を運ぶ際に収めるダンボール箱は大学図書館事務長の関戸信夫氏の提供を受け、重いダンボール箱を運ぶに際しては当時法学部四

年生でラグビー部に所属していた頑健で力持ちの清水保臣君の助力を得た。

鎌倉市雪ノ下——三二〇の小林家の書齋は、小林氏の亡くなった昭和五十八年から十年が経過しているにもかかわらず、先ほどまでこの書齋の主がここで本を読み、ここで執筆していたかと思わせるようなたずまいを示していた。そのままにしておくこと、変えないことという御家族の配慮が感じられた。私は書齋壁面に作りつけられた書架に配された図書を写真に撮った。

白洲明子さん、信哉さんの話によると、同じ鎌倉雪ノ下であるが、足かけ三十年を過ごした八幡様の裏の山上の家からこちらに昭和五十一年に引越して来た時に、本の冊数はわからないけれど小林氏は蔵書の大半を処分された由である。

昭和五十年に「毎日新聞」に発表された『交友対談』と題された、今日出海氏との対談の中で小林氏は次のように発言されている。

《小林 老人は過去に生きると言われるけれど、そうかな。そんな事はないなあ。あつたとしても、それは詰らねえ事だつたという事の裏面を言うに過ぎない。そんな気持だなあ。こんな事を言い出すのはねえ。今度引越しするとなつて考

えたんだがねえ。私んところには、別段余計な持ち物なんかない。

ところが運ぶとなつてこれは不可能と思つたのは本だよ。三十年経つとよくもこれだけ溜るものだと呆れたね。俺は怪我つぽい男だよ、よく言われて来たが。思想精神の怪我つぽさを見せつけられているように思つたな。書庫を造つて整理するなんて器用な真似は私には出来なかつた。ただ雑然と溜まつているのだ。文士というのは、本に頭をやられた男なんだな。本の山が俺にはつきりそう言っているんだ。そんな気がした。》

こうした発言から想像しても、小林氏の引越しに当つての本の処分の方法は「よくもこれだけ溜るものだと呆れ」るほどの量の本を、「整理するなんて器用な真似」もなしに、思い切りよく、なかば古本屋まかせのものだつたろうと思われ「小林秀雄文庫」を整理していても強く感じられることであるが、小林氏は本を徹底的に消耗品として取り扱っていた文士であつたようだ。

だから、こちらの家にはそんなに残つてはいないのだと明子さんも信哉さんも言うのだが、一瞥しても千冊は優に越すと思われたし、洋書をふくむベルグソン関係の一群の図書と

本居宣長関連の図書に目がひかれた。ちなみに、雑誌『新潮』に昭和四十年六月号から始まった「本居宣長」の連載が完了するのは昭和五十一年十二月号においてであり、単行本の『本居宣長』の刊行は昭和五十二年十月である。すなわち引越しを終えて、新居に移ってからも小林氏の宣長論の執筆は続けられているわけで、宣長関連の図書は格別な配慮をもって旧居から運ばれたであろうことが想像されるのである。

ダンボール箱に番号をつけ、該当する番号のカードにその箱に収める本の書名を記す作業から本を運ぶ作業まで、明子さんは終始手伝って下さった。「本は活用されてはじめて価値があるのだから」と言って下さったが、同時に活用する方法に一つの条件をつけられた。

「父が最も嫌がっていたこと」として、明子さんの強く言明されたことは大略次の如きことである。自分の公表した文章はおろそかにされ、断片的に書いたメモや葉書の一文を継ぎ接ぎして自分の文章が引用されること。また、とるに足りない瑣細な資料から何事かを詮索されることである。いささか飛躍するようであるが、私は明子さんの言を聞きつつ、小林氏の「西行」の一節を反芻していた。《凡そ詩人を解するには、その努めて現さうとしたところを極めるがよろしく、努

めて忘れようとし隠さうとしたところを詮索したとて、何が得られるものではない。》さもありなん、小林氏の意志ははつきり御家族に受けつがれている、と感じた。

小林氏は時にメモを本に挿む習慣があったらしい。ダンボール箱に収める前に、背を上にして頁をばらばらと繰ると、頭髪の落ちることはなく、たまにメモ用紙の落ちることがあった。明子さんは躊躇することなく、そのメモ用紙を破り捨てた。話によれば、前もって信哉さんが全冊についてメモ類が挿まっていないか点検したというが、それでも頁の間にかくれてへばりついていたメモがあったとみえる。私は本の頁を繰りながら、それにしても勿体ないなあという思いも禁じ得なかつたが、もしもそのメモ類の管理まで任されたら困惑せざるを得ないとも思った。しかし、気前よく全冊下さったものである。付言すれば美術書は教育研究所ではなく、レコードと共に清春の白樺美術館に寄贈された。

所長の中村英雄氏は図書を教育研究所に運びこんだ直後、ざっと報告をしておいたので私の恩師であり、当時成城大学学長であった山田俊雄先生に、本を見ていただくように、と言われた。多くの図書はカードを一覧していただいたが、和本は現物を見ていただいた。文化五年版本の「古事記傳」全

巻、文化九年版本の「玉勝間」全巻ももとより貴重本であるが、版本「烏丸本つれく草」は慶長古活字版であり、価値の高いものとの指摘を受けた。

また、この文庫の活用について山田先生は、昭和を代表する文芸評論家が生涯を終えた書斎の書架はかくの如きものと復原して置くことも一つの方法ではないかと提案なさった。当時、成城大学では一号館の建て替えが準備され、そのための建設委員の諸氏が知恵をしばっていた。私は新一号館の中心を占めるであろう文芸学部の研究室の一郭に「小林秀雄文庫」のコーナーを作っていたきたい旨の案を委員にお伝えしたが、未だ一号館の建て替えは、実施されていない。

「小林秀雄文庫」は分散させるべきではないと考え、現在教育研究所に配架してあるけれども、将来にわたって教育研究所で保管することが適当かどうか。文芸学部の財産として活用されることの方が望ましいと私は思っている。諸賢の御検討を願いたい。

(あおやぎ・けいすけ 成城学園教育研究所職員)